

令和7年度筑波大学附属図書館特別展

古くより日本では、地震や洪水、火事など、さまざまな災害と向き合って暮らしてきました。時には深い悲しみに沈み、時にはユーモアや風刺でそれを乗り越えようとしてきた人びとの姿があります。本展では、江戸時代の災害記録や鯰絵などの資料を通じて、災害に対する人びとの思いや工夫、そして「嘆き」と「笑い」が交錯する心のありようを紹介します。

展示構成

プロローグ：災いのしるし

第1章：災害列島・日本 ― 歴史に見る災いの痕跡

第2章：地域の災害と復興 ― 各地の声と記録

第3章：鯰絵と信仰 ― 「見えない力」との対話

第4章：文化財救出と未来への記憶 ― つなぐ・守る・語り継ぐ

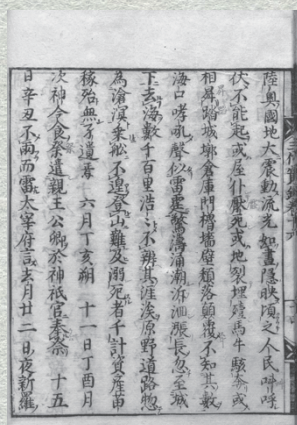
災害の 嘆きと笑い 日本人の記憶とこころ

資料紹介



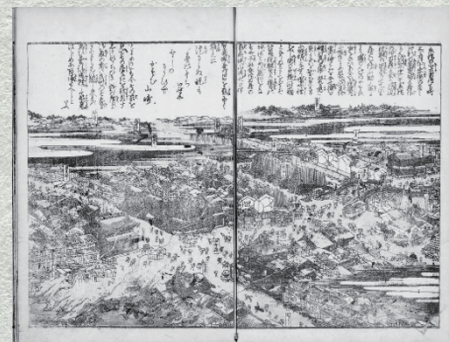
『鯰をおさえる恵比寿』

鯰絵とは、地震の原因を地中の大鯰に求め、それを神仏や人々が懲らしめる様を描いた一群の絵であり、安政江戸地震の後に流行した。本図は、恵比寿天がヒョウタンで鯰を押さえる図である。



『日本三代実録』

『日本書紀』から続く国史「六国史」の最後で、天安2-仁和3(858-887)年を対象として延喜元(901)年成立した。本書は地震の記事が多く、2011年東北地方太平洋沖地震に先立つと言われた陸奥国大地震・津波の記事もある。



『安政見聞誌』

幕末の戯作者である仮名垣魯文が、安政江戸地震と大火の被害を記録したものである。挿絵は歌川国芳らによるもので、被災情報はもとより、被災直後と復興後風景を対比的に描く工夫が見られ、災害時の空気感が生々しく伝わってくる資料である。

特別講演会

2025/10/29(水)

13:30 ~ 15:30

筑波大学中央図書館 集会室

<申込不要>

◆日本美術に刻まれた破局と再生

講師：芸術系准教授 水野裕史

◆記録された日本の災害 ― 何を、どうして、どのように

講師：図書館情報メディア系教授 白井哲哉